

重要海域抽出の具体的手法（案）

1. 重要海域の抽出にあたっての基本的な考え方

海洋生物多様性保全戦略（以下、「海洋保全戦略」）では、「第5章1.（2）生物多様性の保全上重要度の高い海域の抽出」において、重要海域の抽出にあたっての基本的な考え方が以下の通り示された。これらに基づいて重要海域の抽出を行う事とする。

- ① **抽出基準**：「保護を必要とする生態学的及び生物学的に重要な海域（EBSA : Ecologically and Biologically Significant Area）特定のための科学的基準」や国連食糧農業機関（FAO）による「脆弱な海洋生態系（VME : Vulnerable Marine Ecosystem）」の考え方などを踏まえ、生物多様性の機能を維持する観点から重要度の高い海域を抽出する。
- ② **海洋生態系の生物地理区分**：我が国周辺の生態的区分や海域の区分とその特徴も踏まえ、それぞれの海域に特徴的な生態系等がもれないように抽出する。
- ③ **科学的知見の活用**：現在の科学的知見を最大限活用する。
- ④ **生態系の連続性**：多くの海洋生物は特定あるいは複数の生態系や生息・生育場に依存しているため、それらの生態系等に着目し、抽出することが有効である。陸域と沿岸・浅海域との相互の連続性についても考慮されるべきである。
- ⑤ **指標種**：指標性の高い生物種の活用も検討する。
- ⑥ **抽出される海域の点検**：地球規模の気候変化に連動して海流の流路や強さが変化するため、（中略）移行領域等の大きさや位置も変化し、（中略）その機能を認識することは重要である（参考資料5参照）。

海洋の生物や生態系には不明な事が多く、重要度の高い海域を網羅的に抽出することは困難であることに留意し、将来的には科学的知見の今後の充実を踏まえ、必要に応じて抽出される海域を点検することも重要である（参考資料5参照）。

2. 重要海域抽出の精度（スケール）

重要海域抽出の対象海域は海洋保全戦略に示された通り、EEZ内の広い範囲に及ぶ。また、抽出のために用いられる可能性が高い分布情報（GISデータなど）は、沿岸域などの精度の細かいデータから外洋域などのスケールの大きいデータまで様々であり、重要海域の抽出には大小のスケールの差が地域や場所の特性によって生じる可能性があることに留意する。

データの精度、重要海域の用途などを考慮し、沿岸域に関してはおよそ1/50万の地図で表現できる程度（1/50万地図は、地図上で1cmが500mに相当する縮尺）で、外洋域や深海などの広範に及ぶ海域については、およそ1/200万の地図で表現できる程度を基本として、重要海域の抽出を行うものとする（図3参照）。

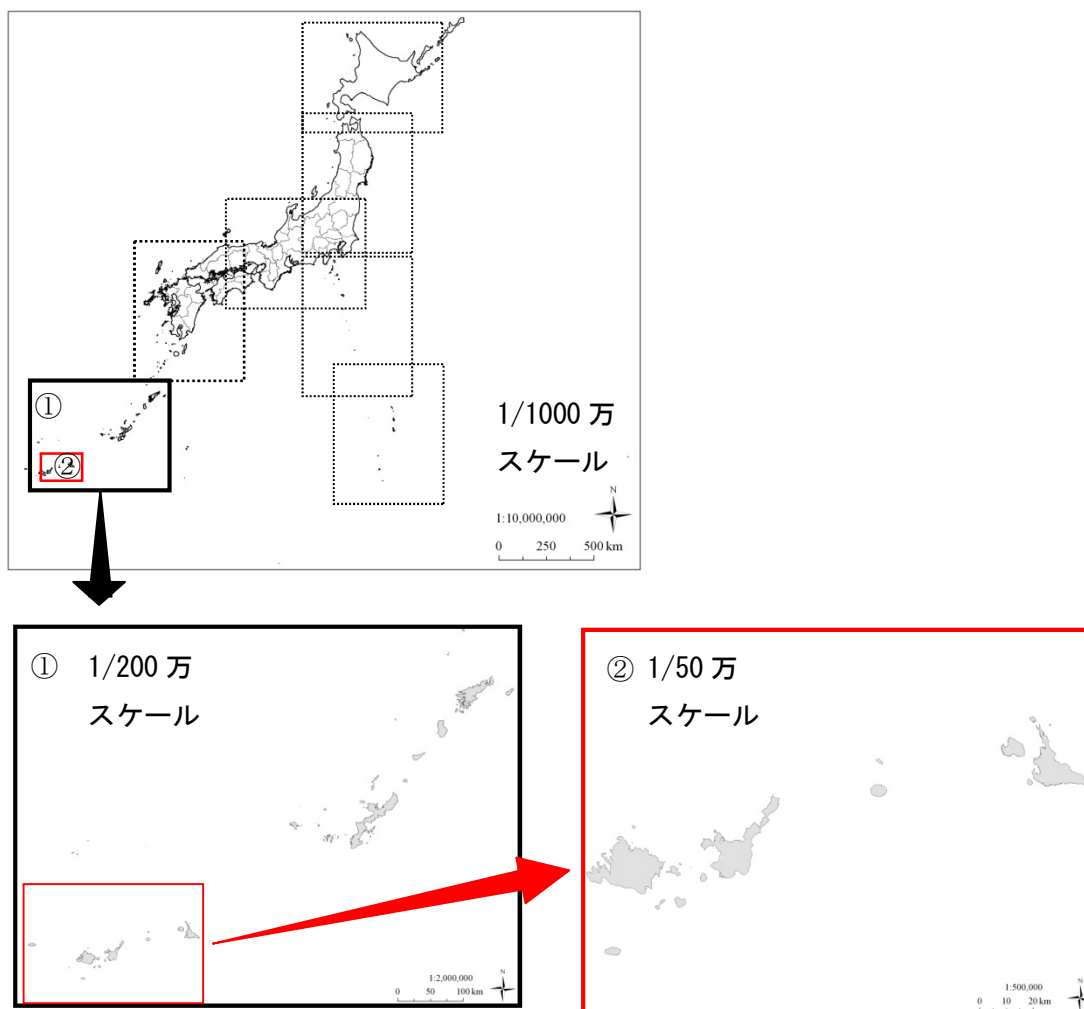


図3 全体のスケール図

※黒枠、赤枠それぞれがA4サイズの下原稿に表される程度のスケールである。

3. 重要海域抽出のアウトプットのイメージ

重要海域は単に重要な場所を抽出したのではなく、将来の海洋保護区の設定や管理の充実等に有効に活用できるものであることが求められる。重要海域ごとにその場所での重要性の理由を示す基礎データを「カルテ」としてわかりやすく示し、保全目標や保全のための指標（種）の選定、保全・管理のあり方の検討を行えるようにすることが必要である。

そこで、アウトプットとして、地図による重要海域の抽出とともに各重要海域における「カルテ」をとりまとめることを目指す（図4）（サンプル図は別紙1参照）。

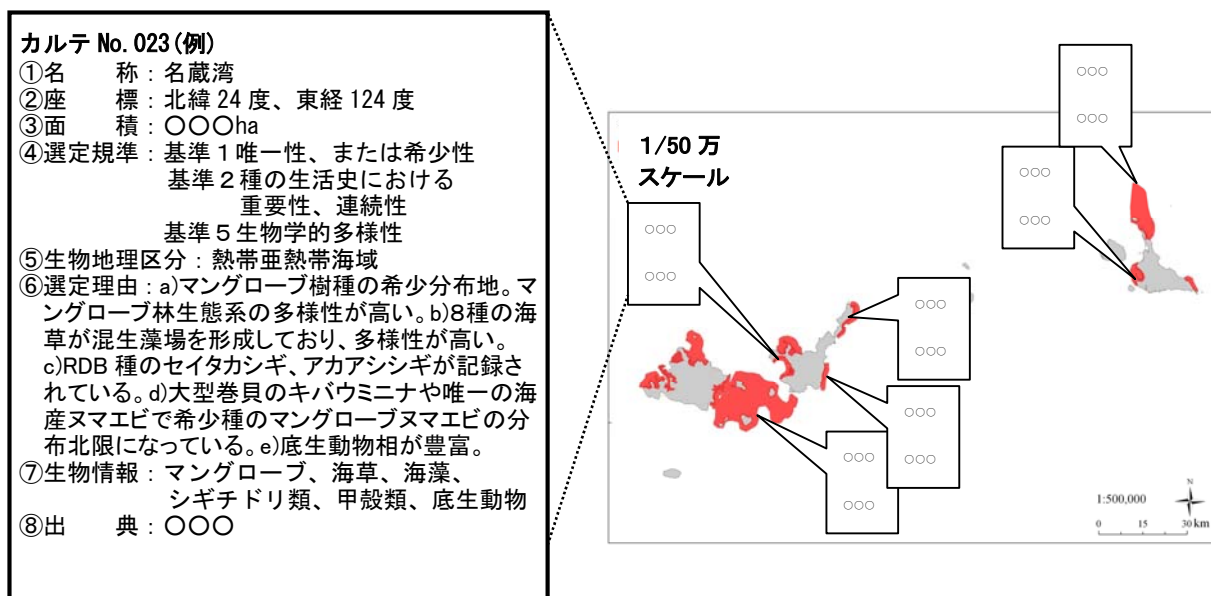


図4 アウトプットイメージ

4. 重要海域抽出のための利用情報、データ

海洋の情報については、陸域と比較すると生物情報、物理情報とも非常に限られ、また利用不可能な情報（未整備、非公開情報）も多数含まれるため、利用可能な情報を最大限に、また包括的に利用する必要がある。

そこで、自然環境保全基礎調査、モニタリングサイト 1000 やその他の生物調査、ハビタットの分布情報などと併用し、環境省の「重要湿地 500」や「国立・国定公園総点検事業」、民間団体が過去に行った重要な生態系の選定・抽出事例を有効に活用し、議論の繰り返しの避け、包括的かつ迅速に重要海域が抽出できるようにする。これにあたっては、抽出基準（詳細は 6. を参照）を十分に満たしているかを検証し、満たしている場合に適用する。また、地域限定で分布する種を除き、基本的には、全国規模で調査を行っている、あるいはそれに準じるデータを優先的に利用することとする。

また、国際的にも頻繁に利用されている空間計画プログラム（ソフトウェア）の有効性を確認した上で、客観的・論理的に抽出するような手法を検討し、重要海域抽出の要素の一つとして検討材料に加えることとする。

5. 重要海域抽出のための具体的手法

重要海域の抽出にあたっては、前述の1.～4.の項目を基本とし、①～③の手順（図5）を進めることとする。

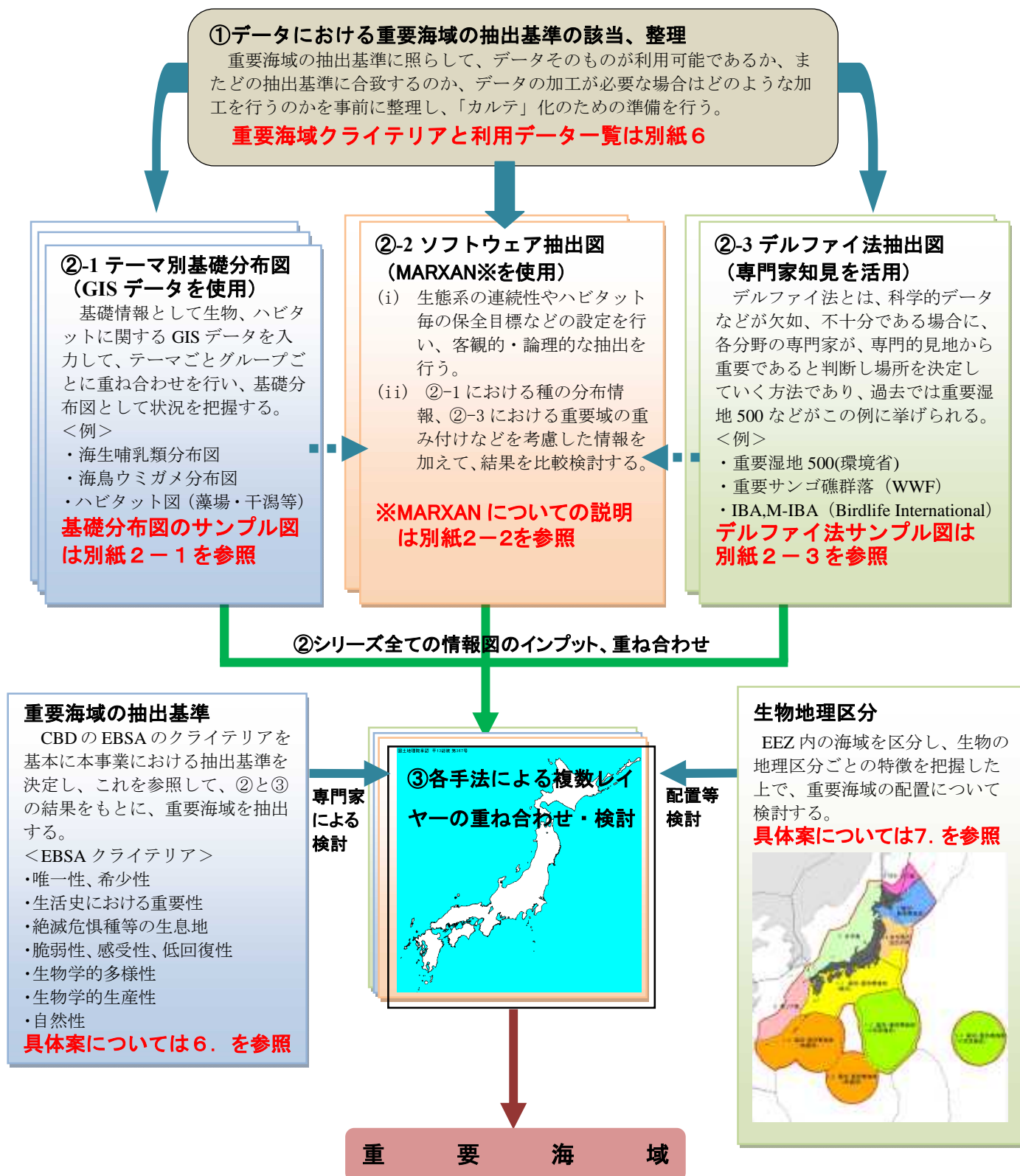


図5 重要海域の抽出のフロー（案）

6. 重要海域の抽出基準（案）

重要海域の抽出にあたっては、海洋保全戦略で CBD の EBSA¹や FAO の VME の考え方を踏まえる事が示された。生物多様性の保全上重要な地域を抽出するための基準にはその他にも複数の事例があるが²、これらを比較した結果、EBSA のクライテリアが最も網羅的であり、また類似の基準の要素も包含していることから（詳細は別紙 3 参照）EBSA のクライテリアを基本とする。その上で、日本の海洋生態系の特徴を踏まえて、本事業における抽出基準を以下（表 1）の通りとし、この基準のいずれかを満たすことを重要海域の必要条件とする。なお、EBSA クライテリアに付け加えを行った箇所を赤字で示す。また、EBSA に示された事例を踏まえた上で、我が国において当てはまると考えられる適用対象を青字で整理した。

表 1 重要海域抽出のクライテリア（案）

クライテリア	定義	理由・根拠	適用対象※
1. 唯一性、または希少性	次のいずれか、または複数を含む地域、 (i) 唯一性(ある種の唯一の分布域)、希少性(特定の地域にのみ分布)あるいは固有性を持つ種、個体群、あるいは生物群集 (ii) 唯一性、希少性を持つ、あるいは特異な生息地・生態系 (iii) 唯一又は独特な地形学的あるいは海洋学的特徴を持つ場所	<ul style="list-style-type: none"> ● 代替がきかないため ● ある種・場所の消失により、多様性あるいは生態系の特徴が永久に失われると考えられる、または多様性のレベルが減少する恐れがあるため 	1-①固有種の分布中心域(各分類群) 1-②種の唯一の生息地等(各分類群) 1-③特異・希少な生態系(化学合成生態系など)
2. 種の生活史における重要性、連続性	個体群の存続・生息/生育のために必要な場所、 あるいはこれらの連続性(生活史間の、異なる生態系間の、物質循環などの非生物学的要素の連続性、または地理的連続性など連続性を考慮すべき場所)	様々な生物的、非生物的状況と種間どうしの物理的制約や選好性などが相まって、特定の生活史の段階や機能にとって、より好適環境を作り出す傾向があるため	2-①種の生活史に重要な場所(繁殖地、営巣地、産卵域、移動性の種の中継地など) 2-②連続した場所
3. 絶滅危惧種または減少しつつある種の生育・生息地	絶滅危惧種及び減少しつつある種の生育・生息地やそれらの種が回復するのに必要な生息地。あるいは、それらの種が集中する場所	絶滅危惧種及び消失しつつある種や、その生育・生息地の再生、回復を確実にするため	3-①絶滅危惧種の生育・生息地(各分類群)

¹ EBSA のクライテリアは、公海における生物多様性の脅威に対して重要な海域の保護を推進するために考案された基準だが、国家管轄圏内（EEZ 内）における同様な海域の抽出にも適用できるとされている（CBD 決議 IX/20、附属書 I、パラ 25）。EBSA の選定は各国及び管轄権を有する政府間機関が行う事項である（CBD 決議 IX/20、附属書 I、パラ 26）ともされており、基準を用いて抽出した区域が自動的に EBSA として CBD に登録記載されるわけではなく、抽出区域にその呼称を用いるかどうか、あるいは CBD に登録記載を申請するかどうかはあくまで各国の判断に委ねられている。当事業で抽出する区域は、公海における議論との混同を避けるため、EBSA の呼称は用いず、現段階では CBD への登録申請は想定していない。

² 国際的に認知度が高い KBA、IBA（M-IBA）、UNESCO 世界遺産の選定基準、国内では重要湿地 500 や WWF-J の重要サンゴ群集の選定基準などがある。

表 1 つづき

クライテリア	定義	理由・根拠	適用対象※
4. 脆弱性、感受性 又は低回復性	(人間活動または自然事象による劣化・消失に非常に影響を受けやすいなどの)機能的脆弱性をもつセンシティブな生育・生息地や種が、高い割合で見られる場所。また回復に時間がかかる場所	このクライテリアは、ある区域や生態系の構造内で自然現象による損失や、人間活動により非持続的に利用されつづけた場合などに引き起こされるリスクの度合いを示す基準である	4-①低回復性の種・生態系(冷水性サンゴ礁など) 4-②脆弱性・感受性の高い種・生態系(船舶起源の汚染、地球温暖化、海水の酸性化、外来種(国内・国外)などの影響を受けやすい海域)
5. 生物学的生産性	高い自然生物学的生産性を持つ種、個体群、あるいは生物群集を含む場所	生態系を活性化し、生物の成長と再生能力を向上させる上で重要な役割があるため	5-①栄養塩を起源とした生産性の高い場所(フロント域湧水域、河口域など) 5-②化学合成生態系(1-③と重複のため空欄)
6. 生物学的多様性	高い生態系の多様性(生息・生息地、生物群集、個体群)、あるいは高い種の多様性、あるいは高い遺伝的多様性を含む場所	種の進化と海洋の種・生態系の復元力の維持において重要であるため	6-①構造の多様性により生物多様性が高い場所(高被度サンゴ群集など) 6-②物理環境(地形・水深)により生物多様性の高い場所(海底境界層、特定水深など)
7. 自然性	人間活動による攪乱あるいは劣化がない、あるいは低レベルである結果として、高い自然性が保たれている場所	<ul style="list-style-type: none"> ● 自然に近い構造、プロセス、機能を持つ地域の保護のため ● 基準地として保全しておくことが必要であるため ● 予防手段であり、生態系回復の促進のため 	7-①人の影響が及びにくい場所(深海生態系など) 7-②人為改変・影響の少ない場所(自然海岸など)

※適用対象は、複数のクライテリアに該当するものもあるが、最もその特徴を顕著に示しているクライテリアに当てはめた。この適用対象は、どのようなデータを用い、どのような解析を行うかのいわば根拠となるものである。具体的な使用データの一覧については、別紙4(重要海域の抽出基準と適用対象、及び具体的対象に関する一覧<作業イメージ(暫定版)>)を参照。

7. 生物地理区分について

重要海域の抽出にあたっては、それぞれの海域ごとの生態系の特徴やバランスが考慮されることがのぞましい。また、候補となった重要海域の配置については、代表性（指標性）、連続性なども考慮される必要がある。その手段として、海洋生態系をそれぞれの特徴ごとに区分した「海洋生態系の生物地理区分」を用いることが有効である。

海洋保全戦略（4章3）では、日本の海況特性等を示すために、主に地形的特徴と海流の分布を考慮した海域区分が示された。ただし、同区分は沿岸域が含まれておらず、また、「黒潮・亜熱帯海域」に南西諸島、小笠原諸島、本州・四国・九州の太平洋沿岸、沖ノ鳥島・南鳥島など海域特性が異なる多くの海域が一つにまとめられている。また、海洋の生態系は面的（二次元的）側面だけでなく、深さによって生物の生息環境が変わる三次元的特性を有していることから、深度に応じた考慮も必要である。

そこで、まずは光量の違いによって生態系の特徴が大きく異なることを考慮し、浅海（水深 200m 以浅）と深海（水深 200m 以深）に大きく区別した上で、それぞれについて以下のように区分する。

なお、大陸棚の限界の延長が大陸棚限界委員会において認められた場合は、生物地理区分の対象範囲の修正を検討するものとする。

<浅海（水深 200m 以浅）における生物地理区分>

濁度により大きく異なるが、太陽光による基礎生産が行われている水層である。海洋の生物地理区分については海洋保全戦略（4章3）で示された海域区分を基本とする。沿岸域については、海域区分の線を沿岸まで延長することとし、また範囲の広い「黒潮・亜熱帯海域」については、18℃等水温線（サンゴ礁の発達に必要と考えられている最寒月の平均水温）によって上下の2つの区域に区分するよう補正する。また、区分はしないものの、瀬戸内海については世界的にみて特異な海洋生態系を有することなどから、その特徴を十分に把握した上で取り扱うこととする。

補正を行った生物地理区分を図6に、また生物地理区分ごとの特徴を表2に示した。

<深海（水深 200m 以深）における生物地理区分>

太陽光が届かない水層である。浅海に比べて情報が極めて限られているため、主に生物多様性が高いことが知られている特徴的な地形や生態系（海山や化学合成生物群集域など）について、利用可能な情報を基に抽出する。

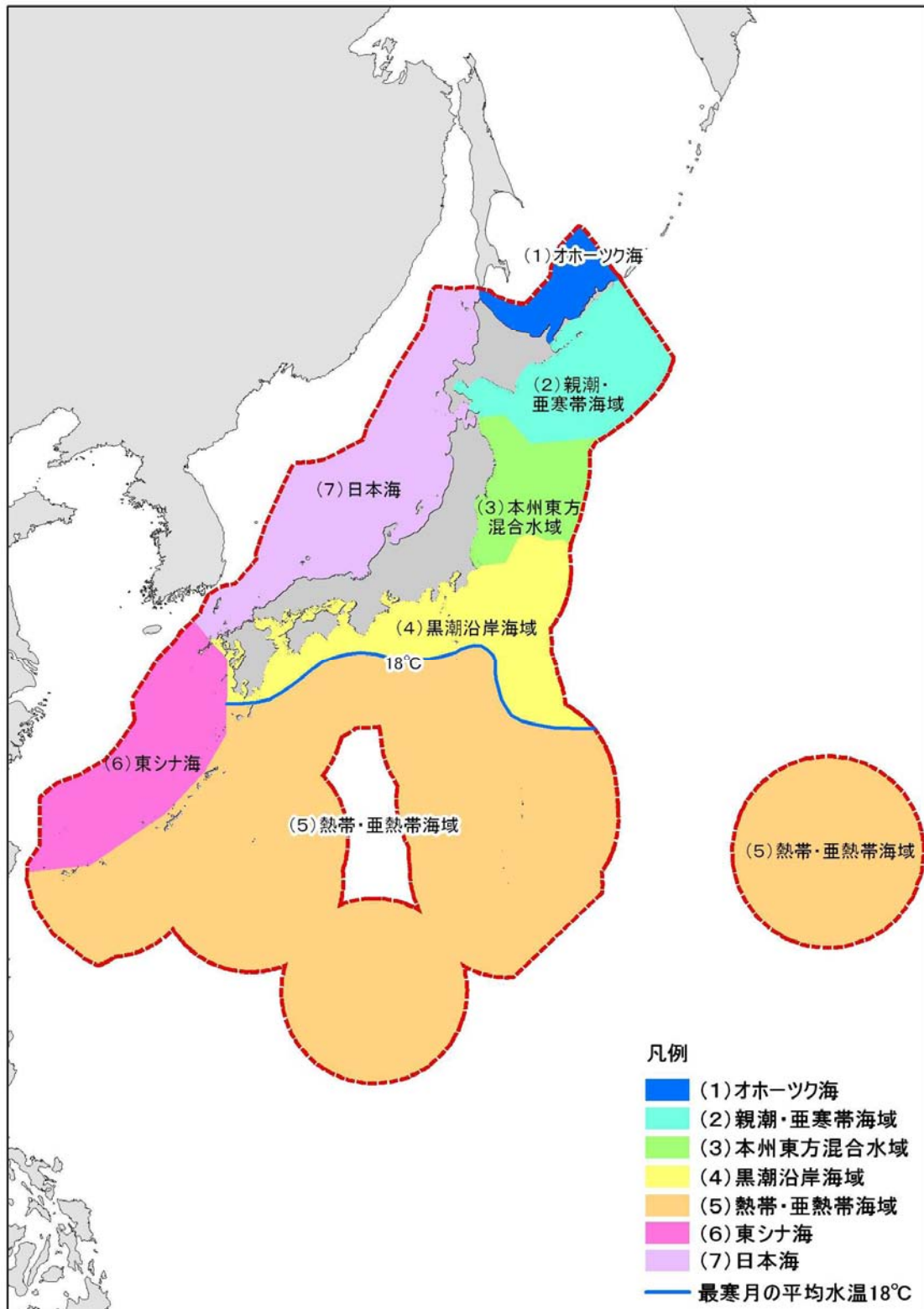


図6 浅海（水深200m以浅）における生物地理区分（案）

注：海洋保全戦略で示された海域区分を沿岸へ延長するとともに、海域区分「(1) 黒潮・亜熱帯海域」を、18°C等水温線によって南北2つの区域に区分するなどの補正を行った。

表2 生物地理区分ごとの特徴（案）

区分	地理・地形的特徴	気候・海流等の特徴	生態系・生物資源等の特徴
(1)オホーツク海	<ul style="list-style-type: none"> カムチャッカ半島、千島列島、サハリン、北海道に囲まれた閉鎖性の高い海。 	<ul style="list-style-type: none"> 世界で最も低い緯度で季節海氷が生成する海域で、わが国唯一の氷海域。サハリン東岸に沿ってカラフト寒流が南下している。 対馬暖流由来の宗谷暖流は宗谷海峡から流入し、北海道オホーツク海沿岸に沿って知床半島周辺まで流れている。 冬のオホーツク海北部で季節海氷が形成される際に、低温、高塩分で栄養塩類が豊富な海水が沈降し、オホーツク海中冷水を形成する。 	<ul style="list-style-type: none"> オホーツク海中冷水は、オホーツク海から北西北太平洋の中層域に栄養塩に飛んだ水塊として拡がり、この海域の春の植物プランクトンの大増殖を始めとして、豊かな生物生産を支えている。 季節海氷の底面には付着珪藻類(アイスアルジー)が繁茂して沈降し、底生生物群集(主にろ過食者)の餌となっている。 沿岸域では、流氷の漂着により、流氷由来の特有の生物相が見られる。 水温などの環境は親潮海域に類似しているため、生物相もよく似ており、生物量は多いが種数は多くない。 親潮海域同様に、オキアミ類、カイアシ類などの大型動物プランクトンが豊富で、これらを餌とするタラ類、カレイ類、カニ類など水産有用種の他、海鳥類、鰯脚類、鯨類の索餌海域となっている。 春-初夏のオホーツク海南部は、東北-北海道の河川由来のサケ稚・幼魚の育成海域となっている。秋の沿岸・河川には、北洋海域で成長したサケ、カラフトマスが産卵回遊する。 冬-春は極域の氷縁生態系に似た寒冷性海洋生物(タラ類などの底魚類、ウミワシ類、氷上繁殖型アザラシ類)が優先するが、夏-秋には暖流系表層回遊魚も来遊する。
(2)親潮・亜寒帯海域	<ul style="list-style-type: none"> 北海道東岸以北と千島列島で囲われた海域。 北米・太平洋プレートの衝突域で、千島・カムチャッカ海溝が南北に連なっている。 	<ul style="list-style-type: none"> 黒潮に匹敵する流量を有する親潮の流域。 親潮は、オホーツク海、西部亜寒帯循環の表層水から由来し、舌状に南下している。 親潮は、襟裳から南下する親潮第一分枝(貫流)、その分枝で北海道-東北沿岸に沿って流れる沿岸親潮、沖合の第2分枝(貫流)に区分されている。 	<ul style="list-style-type: none"> 親潮は低温・低塩分、豊富な栄養塩類の表層流で、外洋域の一次生産は大型植物プランクトン(珪藻類)の春季大増殖が支えている。 沿岸では冷水性の生物相が発達する。一般に、生態系の生物量は多いが種数は亜熱帯水域などに比べると少ない。 オキアミ類、カイアシ類などの大型動物プランクトンや中深層性魚類・イカ類が豊富で、これらを餌とするサケ類、タラ類、カレイ類など水産有用種の他、海鳥類、鰯脚類、鯨類の索餌海域となっている。 夏-秋の親潮-移行領域には、サバ類、イワシ類、イカ類などが北上回遊し、彼らの重要な摂餌・成長海域となっている。 秋の沿岸・河川には、北洋海域で成長したサケ(シロサケ)が産卵回遊する。 沿岸岩礁域には大型褐藻類(コンブ類など)が繁茂し、ニシンなどの重要な産卵場所となっている。また、アワビ類・ウニ類等の有用底生生物が豊富に生息する。 砂浜域では、アマモ場が広がる。 道東沿岸域には、日本で唯一陸上繁殖するゼニガタアザラシが生息し、エトピリカなど希少海鳥類も繁殖している。

表2 つづき

区分	地理・地形的特徴	気候・海流等の特徴	生態系・生物資源等の特徴
(3)本州 東方混合 水域	<ul style="list-style-type: none"> 三陸沖合は、北米・太平洋プレートの衝突域で、日本海溝が南北に連なっている。 三陸沿岸はリアス式海岸が発達している。 	<ul style="list-style-type: none"> 黒潮統流の沖合の北側には、黒潮一親潮移行領域(混合水域)が夏一秋に広がり、暖水・冷水渦を含む複雑なフロント構造が発達する。 三陸海岸には、黒潮、親潮、さらには津軽海流が流れ込む混合水域が形成され、非常に複雑な海洋環境となっている。 	<ul style="list-style-type: none"> 温帯性種と亜寒帯性種とが共存する独特の生物相を形成する。黒潮流域に見られる亜熱帯性種はほとんど見られない。 内湾ではアマモ場・海藻藻場がよく発達する。 潮下帯が広い場所が多く、棘皮動物などが優占する。 沖合の黒潮一親潮移行領域は、サンマ、サバ類、イワシ類などの浮魚類・イカ類、マグロ類やカツオなど大型回遊魚の索餌・成長海域となっている。 寒流系及び暖流系両方の魚類相が見られるが、寒冷レジェーム期には寒流系魚類およびマイワシ、温暖レジェーム期には暖流系魚類が卓越する。 春-初夏の三陸沿岸はオキアミ類が豊富で、これらを餌とするヒゲクジラ類、赤道渡りをして北上中のミズナギドリ類の重要な索餌海域となっている。 海溝域には、冷湧水生態系が見られる。
(4)黒潮 沿岸海域	<ul style="list-style-type: none"> 九州沿岸及び八丈島から本州太平洋沿岸の房総半島沖にかけての太平洋側の広域な海域で、伊豆諸島を含む。 フィリピン海プレート、太平洋プレート、ユーラシアプレートの衝突域を含み、南西諸島海溝、伊豆小笠原海溝、南海トラフなど、切り立った深い海溝が多い。 	<ul style="list-style-type: none"> 紀伊半島以北は温帯域、以南は亜熱帯域に属する。 最寒月の平均水温18℃の等水温線によって、南の亜熱帯海域と分けられる。この境界付近を世界最大級の黒潮が本州東岸にそって北上している。比較的浅い伊豆マリアナ海嶺によって、黒潮中深層は拡散する。 黒潮は、房総沖から東に向う黒潮統流となり、北米西岸へと流れている。 	<ul style="list-style-type: none"> 沿岸域では亜熱帯域に分布中心を持つ種の一部と、温帯域固有の種とが混在する。この海域では海草はほとんどがアマモ類で、マングローブはほとんど見られない。アラメ・カジメ・ホンダワラなどの海藻類が岩礁域では豊富に分布する。 黒潮は高温・高塩分、栄養塩類の少ない表層流であり、外洋域の一次生産は小型植物プランクトンが支えている。 黒潮により暖水性の生物相が見られ、微小生物食物連鎖と小型動物プランクトン、中深層性魚類・イカ類、小型浮魚類、大型回遊魚、海鳥類、鯨類を含めた複雑な生食食物網が形成されている。 薩南から房総までの黒潮内側域には、イワシ類、サバ類、沖合の統流域以南には、サンマ、アカイカの産卵場が存在する。 南日本の砂丘海岸を中心にアカウミガメ北太平洋系群の産卵地になっている。 ホンダワラ類で構成された流れ藻が沖合で産卵場や稚仔魚の移動に利用されている。 相模湾など一部の海域には、冷湧水生態系が見られる。 温帯域ではサンマなどの高温性温帯種が生息し、夏期にはカツオなどの高温性熱帯種が来遊する。亜熱帯域ではトビウオ類などが多く、沿岸では温帯種に亜熱帯種が混じる。 ニタリクジラなどの外洋性の鯨類が見られる。

表 2 つづき

区分	地理・地形的特徴	気候・海流等の特徴	生態系・生物資源等の特徴
(4) つづき	<ul style="list-style-type: none"> 瀬戸内海は、本州、九州、四国に囲まれている日本最大の閉鎖性海域である。多島海で、海域の水深は浅い。 	<ul style="list-style-type: none"> 瀬戸内海は、「灘」と呼ばれる流れが穏やかな広い海域と、「瀬戸」と呼ばれる潮流の早い狭い海域が交互に存在する。 	<ul style="list-style-type: none"> 瀬戸内海は、複雑な海岸線が多いため、多様な海洋環境が存在し、特に内湾性の多様な生物が豊富に生息・生育している。 内海であること、暖流の影響が少ないことなどから、太平洋沿岸に比べると、亜熱帯性の種が少なく、温帯種が多い。 瀬戸内海の一次生産は比較的高く、マイワシ、カタクチイワシ、シラス、イカナゴなどのプランクトン食性魚類が多い。 瀬戸内海の沿岸には、干潟やアマモ場などの浅場が点在し、底生生物等の生息の場やカブトガニ繁殖地となっている。また、各地に砂堆があり、ナメクジウオやイカナゴ等の生息の場となっているため、イカナゴを主な餌とするスナメリの回遊やアビ類の飛来がある。
(5) 熱帯・亜熱帯海域	<ul style="list-style-type: none"> 南西諸島からトカラ列島、八丈島の南にかけての太平洋側の広域な海域で、小笠原諸島を含む。 フィリピン海プレート、太平洋プレート、ユーラシアプレートの衝突域を含み、南西諸島海溝、伊豆小笠原海溝、南海トラフ、小笠原トラフなど、切り立った深い海溝が多い。 	<ul style="list-style-type: none"> 沖ノ島島は日本唯一の熱帯域。南西諸島は亜熱帯域。 最寒月の平均水温18℃の等水温線によって、北の黒潮海域と分けられる。この境界付近を世界最大級の黒潮が本州東岸にそって北上している。 比較的浅い伊豆マリアナ海嶺によって、黒潮中深層は拡散する。 四国沖には、南西に向かう黒潮逆流が存在している。 	<ul style="list-style-type: none"> この海域は、黒潮を介して、世界で最も生物多様性の高い「Coral Triangle」海域とつながっており、世界的にみても海洋生物の多様性が非常に高い海域と言える。 低緯度海域は、亜熱帯性の海洋環境にあり、沿岸域にはマングローブ・サンゴ礁・海草・海藻などの多様な生態系が見られる。 黒潮は高温・高塩分、栄養塩類の少ない表層流であり、外洋域の一次生産は小型植物プランクトンが支えている。 黒潮により暖水性の生物相が見られ、微小生物食物連鎖と小型動物プランクトン、中深層性魚類・イカ類、小型浮魚類、大型回遊魚、海鳥類、鯨類を含めた複雑な生食食物網が形成されている。 砂浜海岸ではアカウミガメ北太平洋系群とアオウミガメが産卵する。小笠原はアオウミガメの最大の産卵地である。 マグロ類など大型魚類の産卵海域であり、高度回遊魚類の回遊ルートとなっている。 小笠原諸島海域には世界の鯨類の約 3 割の種が生息している。また、一部の島嶼にはアホウドリ類が繁殖している。 伊豆・小笠原海域-マリアナ海域及び南西諸島海域には、熱水生態系が見られる。 サンゴ礁地形が発達し、豊富な種からなるサンゴ群集が見られる。 ザトウクジラの回遊及び繁殖地が慶良間諸島を中心に見られ、また分布の北限であるジュゴンの数少ない生息地が沖縄島に見られる。

表2 つづき

区分	地理・地形的特徴	気候・海流等の特徴	生態系・生物資源等の特徴
(6) 東シナ海	<ul style="list-style-type: none"> 南西諸島の西側で、200m 以浅の陸棚が 70%を占めているが、琉球諸島に沿った東シナ海南東海域の陸棚斜面は急峻で、水深1000m 以上に深くなっている。 陸棚域は揚子江などの陸水の影響を受けた厚い砂泥堆積物で覆われている。 	<ul style="list-style-type: none"> 黒潮の上層部が、狭い台湾東方の海峡を通過して東シナ海に入り、トカラ海峡から再び太平洋に抜けている。 その内側の大陸棚斜面域の上層には、中国大陸沿岸由来の中国冷水と黒潮との表層混合水が形成され、九州沿岸に沿う半時計回りの渦となっており、その一部は対馬暖流として日本海に流入している。 	<ul style="list-style-type: none"> 中国大陸側の大陸棚-斜面海域は、日本海同様に、冬の季節風による鉛直混合、春以降の日射量の増加と水温の上昇に伴って植物プランクトンが増殖する。 日本海の対馬暖流および北太平洋の黒潮に沿って北上回遊する多くの浮魚類(ブリ、アジ、サバ類など)やスルメイカ冬季群の産卵・育成場となっている。 大陸からの大量の物質の供給により、外洋域および大陸棚域の生物量が非常に大きい。 沿岸域は、環境的には黒潮亜熱帯域と同等であり、生物相も違いはない。したがって、世界でも有数の生物多様性の高い海域である。 熱水生態系が南西諸島周辺に多数分布している。 有明海、平戸湾、八潮湾などの閉鎖性の高い内湾を有し、ハゼ類などの固有性の高い種を多く有する。 瀬戸内海と同様、スナメリなどの海生哺乳類が生息する。
(7) 日本海	<ul style="list-style-type: none"> 対馬海峡、津軽海峡、宗谷海峡、間宮海峡に囲まれた深い海盆状の閉鎖性の高い海。 日本海の中央部には大和堆と呼ばれる浅瀬がある。 遠浅で比較的傾斜の小さい海底地形(大陸棚の存在)。 	<ul style="list-style-type: none"> 黒潮と東シナ海の中国沿岸水などの混合した対馬海流が北上している。この海流は、朝鮮半島東岸に沿う流れと本州日本海沿岸に沿う流れがあり、大陸沿岸に沿って南下するリマン海流との間に複雑な暖水・冷水渦やフロントを形成する。 表層から水深約 300m までは対馬暖流、下層は1℃以下の日本海固有水が占める。この固有水の由来は、冬の季節風によってロシア沿岸で沈降する低温・高塩分水である。 	<ul style="list-style-type: none"> 冬の季節風によって日本海は鉛直混合が生じ、中低層の栄養塩類が表層に運ばれ、春以降の日射量の増加と水温の上昇に伴って植物プランクトンが増殖する。 対馬暖流は高温、高塩分、低栄養塩類の表層流だが、リマン海流との複雑なフロント海域では、親潮-黒潮移行領域と似た高い一次生産が起きる。 主に東シナ海を産卵場とする暖流系魚類(クロマグロ、ブリ、アジなど)とスルメイカが対馬暖流に沿って北上し、秋以降には山陰-東シナ海の産卵場に南下回遊する。 大陸棚および斜面域には、南は暖流系、北は寒流系の種が多い。深海域にはズワイガニ類が多く生息する。 日本海は成立してからまだ時間が短いため、一般に生物多様性は他の海域に比べて低い、生産量は少ない。 干満がほとんど無いため、干潟生態系が発達しない。 沿岸域の底生生物相は、黒潮流域の生物相の一部。ただし対馬暖流の影響で、暖流系種の分布は太平洋側よりも高緯度まで広がる。 中深層性域は、日本海固有水の影響を受け、限られた種のみが分布する。魚類では、キュウリエソ、ノロゲンゲなどが優占し、その他にホタルイカなどが分布している。

注：本表は海洋生物多様性保全戦略より一部改変して作成したもの。